

## 中・高校生の部 入選

岐阜県立吉城高等学校 一年 渡邊 夏帆

「やっぱり夏帆は、すごいんやよ。誰の子なんや。」と。両親は飛び跳ねるように喜んでくれ、母はぎゅっと抱きしめてくれた。小学二年生の読書感想文で初めて入賞した時だ。周りからも褒められ高揚感に浸り、また入賞したい一心で書き続けた。すると六年生の時入賞。家族の喜びようが今でも忘れられない。

私は、幼い頃から本が大好きだった。毎晩母に何冊も絵本の読み聞かせをしてもらった。小学生になると、図書館に毎日通って本の世界に没頭した。本は、新しいことを教えてくれる師匠のような存在だった。本は人格を持っている。時として作者と対面した時よりも人間性や考えを表現していて刺激的だった。私にとってかけがえない発見で今の私の夢につながっているかもしれない。

中学生になると、本格的に作文と向き合い他のコンクールにも積極的に応募。夏休みは充実していた。自分の思いを綴ることが楽しくて私の心の支えであった。気が付くと、現在の私自身の生甲斐となっている。

中学三年生の時書いた人権作文。入賞できず肩を落としていた矢先、審査員の一人から一通の手紙が届いた。「あなたから教えてもらったことを大切に、私もできることから始めます。」と。思わず熱い涙が込み上げてきた。優秀賞でもない私の作文に感動してわざわざ手紙を書いてくださった審査員。この一通の手紙に感極まった。書く意義を強く感じた。

高校生になり、この荒垣顕彰作文を書いて私は確信した。「小説家になりたい」と。私の小説で読む人の人生観を動かしてみたい。それで救われる人がいたら、人生の景色が・色が、百八十度変わるかもしれない。頂点の景色を見してみたい。時の人の米澤穂信さんが斐太高校生の時、彼の父親の口癖は「うちの息子は小説ばかり書いている。」だったそうだ。

小説家への夢はどんどん膨らむ。大きな希望の詰まった私の夢。私はこの夢を叶えるために、今年の夏も作文を書き続ける。